キニク氏族とアフラーシヤーブ

——ペルシア語普遍史叙述の展開とセルジューク朝の起源——

The Qiniq and Afrāsiyāb: The Development of the Persian General Histories and the Origin of the Saljūqids

大塚 修^{*}
OTSUKA Osamu

ABSTRACT It is generally accepted that the origin of the Saljūqids (Seljuks) is the Qiniq clan, one of the clans in the Turkish Oghuz tribe. While it is considered as “a historical fact,” the origin also has been linked with Afrāsiyāb, the legendary Turkish hero in Iranian myth by many traditional historians. Although both the origins were stated in many previous studies, it has not been explained why the Saljūqids have been linked with two totally different origins and how traditional historians described it. This article reexamines the descriptions of the origin of the Saljūqids by analyzing all available Arabic and Persian sources written before the end of the 16th century. Especially, the following two points are focused on: 1. How were the two origins described by traditional historians? 2. How was the image of the Saljūqids formed in after ages?

Conclusions:

1. Even in the Saljūqid period, the Afrāsiyāb origin, the fictional origin, came to be stated in some sources. After fall of the Saljūqids, the Persian historians preferred the Afrāsiyāb origin. The main reason for this is that when writing Persian general histories, it was considered important to link the origins of Iranian dynasties, including the Saljūqids, with Iranian mythical heroes. Furthermore, as in the 14th century *Jāmi‘ al-Tawārīkh* of Rashīd al-Dīn, the prototype of the history of the Turkish tribes, the image of the Qiniq is rather negative, the Qiniq origin was avoided.

2. In this background, also there was a positive image of the Saljūqids.

* 東京大学大学院人文社会系研究科博士課程／日本学術振興会特別研究員
Ph.D. Student, Graduate School of Humanities and Sociology, The University of
Tokyo/Research Fellow of the Japan Society for the Promotion of Science

In particular, Ḥamd-Allāh Mustawfī, the author of the 14th century *Tārīkh-i Guzīda*, bestowed his utmost praise on the Saljūqids, and he was often quoted by later historians. Thus, the positive image of the Saljūqids became established, and the dynasty was often praised by later historians.

I. はじめに

セルジューク朝 (1038-1194) の起源に関して、中世イラン史研究の碩学ボズワース C. E. Bosworth は『イスラム百科』新版で次のように説明している。

再びカーシュガリーによれば、オグズ部族の中で第一の氏族はキニク氏族であり、彼らからその君主は現れた。セルジュークの一族や近親（元来それほど巨大な社会集団であったようには見えない）は、キニク氏族出身であった。その後、セルジューク朝がペルシアで権力を確立すると、その一族に栄誉ある過去を与えようという試みがなされ、トゥグリル・ベクの官吏アブー・アルアラー・ブン・ハッスール (450/1058 没) は彼らを伝説上のトルコの王アフラスィヤープに結び付けた。⁽¹⁾

トルコにおけるセルジューク朝史研究の大家カフェスオール İ. Kafesoğlu もトルコ語版『イスラム百科』で同様の説明をしており、これは今日の定説となっている。このようにセルジューク朝の起源を説明する際には、「トルコ系オグズ部族に属するキニク Qiniq 氏族」と「古代イラン史における伝説上のトルコの王アフラスィヤープ Afrāsiyāb」という出自が注目されてきた。

王朝がその起源を如何に表象していたのかを考察することは、その王朝の権威の源を探る上で必要不可欠な作業である。しかし、この二つの起源に関しては先行研究の成果が再生産されるに留まり、基本的な書誌情報の誤りすら再検討⁽³⁾されない状況にある。またトガン Z. V. Togan のように、十分な「史料批判」を行わずに同時代史料と後世の英雄叙事詩の記述を照合して系譜を再構成する研究も見られる⁽⁴⁾。このトガンの研究を批判的に再検証し、セルジューク朝の起源に関する諸史料の言説を三つの系統に分類したカフェスオールの研究もある⁽⁵⁾が、それも王朝の起源が如何なる背景の下で叙述されていたのかについて分析したものではない。

本稿で明らかにするのは、歴史家が如何にその起源を叙述し、その評価が如何に変化していくのかという点についてである。この起源の評価という問題に

ついては、アフマド N. Ahmad などが、セルジューク朝はその出自により自らの支配を正当化していたわけではないと指摘しているが、⁽⁶⁾これも具体的に事例を積み上げた上での結論ではない。そこで本稿では、キニク氏族とアフラスィヤーブというセルジューク朝の起源とされる二つの出自に関する諸言説が、通時的に如何に変容していくのかを分析し、セルジューク朝の権威が同時代に如何に認識されていたのか、そしてそれが王朝崩壊後如何に変容していったのかを明らかにしたい。また同時に、言説の変容に大きな影響を与えたと考えられるペルシア語普遍史（人類創世から同時代に至る人類史）史料群の性質と歴史家が抱いていた歴史認識の変容についても言及したい。史料に関しては、16世紀までに著されたアラビア語・ペルシア語史料を出来得る限り網羅的に分析した。16世紀までに時代を区切ったのは、この頃までに言説の凡そ全てのバリエーションが出揃うためである。

II. 同時代史料（11～12世紀）が描くセルジューク朝の起源

1. キニク氏族

管見の限り、同時代史料の中でキニク氏族に言及しているのは、バグダードで著されアッバース朝カリフ・ムクタディー（r. 1075-94）に献呈されたマフムード・カーシュガリー Maḥmūd al-Kāshgharī 著『トルコ語集成 *Dīwān Lughāt al-Turk*』のみである。⁽⁷⁾この有名なトルコ語アラビア語辞典において、オグズ部族は22氏族構成とされ、「彼らの中心 surra はキニク氏族であり、時のスルターンたち〔セルジューク朝君主〕はそれ〔キニク氏族〕に属する」と説明される。⁽⁸⁾ここでは、セルジューク朝の起源はキニク氏族に求められ、そのキニク氏族はオグズ部族の中で最有力氏族であったと明記されている。

これは数多の先行研究が言及してきた記述であるが、同時にカーシュガリー以外の同時代の歴史家たちがキニク氏族に言及していない点について留意せねばならない。カーシュガリーより数十年前に活躍した、トゥグリル・ベク（r. 1038-63）の官吏イブン・ハッスール Ibn Ḥassūl は自著『トルコ人の優越 *Tafḍīl al-Atrāk*』の中で、「このスルターン——神が彼ノ勝利ヲ強メマスヨウニ——の血統 nasab は、その榮譽に関し十分であり、他の者たちの血統のように、隷属する脆弱な者や身分の低い無名の者に帰するものではない」と叙述しており、⁽⁹⁾王朝初期からセルジューク朝の王統が称揚されていたことが分かる。しかしな⁽¹⁰⁾

がら、このように王朝の血統が正当性を主張する要素の一つであったにもかかわらず、王朝やそれに帰属する知識人がその正当性をキニク氏族起源に求める記述は確認できないのである。⁽¹¹⁾

また、セルジューク朝初期史を再構成する史料として価値を認められている、アルプ・アルスラーン(r. 1063-72)に献呈された著者不明『王の書 *Malik-Nāma*』には次のようにある。この史料は今日散逸しているが、後世の史料に残る引用箇所から、その内容の一部を知ることができる。⁽¹²⁾

ハザル平原 *dasht-i Khazar* のトルコ諸部族は、ドゥカーク *Duqāq* をタミル・ヤーリーグ *Tamir-Yāligh* すなわち「巧みな射手 *sakht-kamān*」⁽¹³⁾と呼んでいた。彼は、王権の諸事を整えることについて輝かしき頭脳と正しき手腕を有していた。彼の完全な勇猛果敢さは「人々の」舌の中をめぐり口の中に残った。ヤブグー *Yabghū* というハザルの王は、彼「ドゥカーク」⁽¹⁴⁾と協議せずに人民の諸重要事に介入することはなかった。

ここではセルジュークの父ドゥカークが、ハザルの王に近い扱いを受けている。また、同じ内容を伝えているイブン・アルアスィール *Ibn al-Athīr* 著『完史 *al-Kāmil fī al-Ta'rikh*』⁽¹⁵⁾では「オグズ・トルコの指導者 *muqaddam*」と形容されており、その出自の良さがうかがえる。そしてその後、息子セルジュークの代にヤブグーと決別し、一族郎党を引き連れ中央アジアのジャンドに移動し、イスラームに改宗するという形で話は展開していく。⁽¹⁶⁾このように、王朝初期に編纂された史料では、王朝の出自の良さが強調されるものの、キニク氏族への言及は確認できないのである。

2. アフラーシヤープ

このように、同時代史料ではキニク氏族に関する記述がカーシュガリー以外から確認できないのに対して、アフラーシヤープに起源を求める記述は散見される。

まず、アルプ・アルスラーンとマリク・シャー (r. 1072-92) の2代に亘りワズィールを務めたニザーム・アルムルク *Nizām al-Mulk* が著した政治指南書『諸王の行状 *Siyar al-Mulūk*』の中には、次のような記述がある。

〔神は〕世界の主にして至高なる王中の王 *shāhanshāh-i a'zam* 〔マリク・シヤープ〕を、王位 *pādshāhi* と指導者位 *pish-rawī* がつねに彼らの家系にあ

るようなところで〔それは〕偉大なるアフラーシヤーブ Afrāsiyāb-i buzurg に至るまで代々父系の血統を辿れる一二つの高貴な起源 aṣl から生ぜしめた。⁽¹⁷⁾

ここではマリク・シャーの出自の高貴さを示す一要素として、アフラーシヤーブにつながる血統が主張されている。また、サンジャル (r. 1118-57) の文書庁 diwān-i inshā 長官を務めたムンタジャブ・アッディーン・ジュワイニー Muntajab al-Dīn al-Juwaynī が編纂した公文書集『書記の敷居 'Atabat al-Kataba』に収められた任命文書 taqlid 中にも、政庁 diwān を修飾する言葉としてアフラーシヤーブが用いられている。⁽¹⁸⁾

この二つの事例はいずれも、セルジューク朝内部の人物の証言であり、少なくともマリク・シャー以降に、王家とアフラーシヤーブの結び付きが主張されていたことは明らかである。メイサミ J. S. Meisami は、このアフラーシヤーブを「アフラーシヤーブ家 Āl-i Afrāsiyāb」と呼ばれていたカラ・ハーン朝 (840-1212) 王家との関係 (マリク・シャーの妻はカラ・ハーン朝の王女) を意識した記述と解釈するが、⁽¹⁹⁾ 次の事例により彼女の説は否定される。その事例とは、サンジャル期の歴史家アブー・アルアラー・アフワル Abū al-ʿAlā Aḥwal が⁽²⁰⁾ 著した『歴史 Tārīkh』である。彼の著作は現在は散逸しているが、1330年に完成したハムド・アッラー・ムスタウフィー Ḥamd-Allāh Mustawfī 著『選史 Tārīkh-i Guzīda』により、その内容の一部が伝えられている。そこには、「彼〔セルジューク〕は34代を経てアフラーシヤーブに至る」⁽²¹⁾とあり、アフラーシヤーブはセルジュークの34代前に置かれている。そのため、このアフラーシヤーブがカラ・ハーン朝を意味するものと解釈するのは難しい。以上より、王朝やそれに帰属する知識人たちが実際に主張していたのは、王朝の出身氏族であるキニクという起源ではなく、後に主張されるようになったアフラーシヤーブに至る起源であったと言える。

III. 後世の史料 (13～16世紀) が描くセルジューク朝の起源

1. アラビア語史料とペルシア語史料の傾向差

本章では、前章で扱ったキニク氏族とアフラーシヤーブという起源が、1194年の王朝滅亡後に、如何に認識されるようになったのかについて論じる。その起源に関する諸史料の記述を整理したのが、(表1)(表2)である。表から分か

るように、後世に成立した史料におけるセルジューク朝の起源に関する叙述の傾向は、アラビア語史料とペルシア語史料で完全に異なる。アラビア語史料では、『王の書』の記述と同様にセルジュークの父「ドゥカーク」⁽²²⁾の事跡から記述が始まり、ドゥカークより遡る事跡に関する言及はない。僅かに『セルジューク朝史 *Akhbār al-Dawlat al-Saljuqiya*』とアイニー al-‘Aynī 著『真珠の首飾り *‘Iqd al-Jumān*』の中に、キニク氏族⁽²³⁾についての言及があるが、その内容は「キニク氏族として知られるこの部族」という程度の言及に留まり、王家の起源を称揚する形のものではない。さらに、アフラスィヤーブに言及している史料は管見の限り一つも確認できない。このようにアラビア語史料では、セルジューク朝の起源に対する関心は極めて低い。⁽²⁴⁾モンゴル侵入以降、アラビア語史料の叙述対象は、概ねエジプトやシリアに限定されていく。その状況下で、イランやイラクを中心に繁栄したセルジューク朝に対する関心が高まることはなく、アイニーなどの僅かな例外を除いては、その記述に多くの頁が費やされることはなかった。

その一方ペルシア語史料には、セルジューク朝の起源に関し独自の展開が見られる。その特徴とは、セルジュークの父の名が『王の書』が伝える「ドゥカーク」という形ではなく、「ルクマーン」という形で伝えられている点である。また、キニク氏族やアフラスィヤーブという起源への言及も多く確認できる。

2. ペルシア語普遍史におけるセルジューク朝の起源

i) キニク氏族起源単独

ペルシア語普遍史の中でキニク氏族に関する叙述が確認できるようになるのは、14世紀以降のことである。イル・ハーン朝（1256-1336頃）下で活躍した歴史家ラシード・アッディーン Rashīd al-Dīn 著『集史 *Jāmi‘ al-Tawārīkh*』第2章「世界史」に収められた「セルジューク朝史」の冒頭には次のようにある。

ルクマーンの子セルジュークは、キニク氏族 *usutkhwān-i Qiniq* の出のセルジューク一族に属し、トルコ諸王の天幕の骨組み職人 *khargāh-tarāsh* であつたクルクチュー・ハージャ *Kurukuchū Khūja* の子トゥークシュー
ルミーシュ *Tūqshūrmish* の末裔にあたる。⁽²⁵⁾

このようにラシードは、カーシュガリーのように出身氏族名としてキニク氏族に言及するに留まらず、セルジュークの遠祖の名やその地位まで伝えている。

ただ注意しておきたいのは、ラシードが叙述するセルジュークの遠祖の地位は、トルコ諸王の「天幕の骨組み職人」であり、その出自が王族や支配者とされていない点である。セルジュークの遠祖を「天幕の骨組み職人」とする同様の言説は後世の史料にも継承されるが、その数は少ない(図2:250-1, 251-3, 251-4, 274)。カーシュガリーとは異なり、ここでのキニク氏族に対する評価は高いものではない。

ii) キニク氏族／アフラーシヤーブ両起源併記

『集史』は、ペルシア語普遍史としては初めてキニク氏族に言及したわけであるが⁽²⁶⁾、これ以降、ペルシア語普遍史ではキニク氏族に言及する記述が増える。しかし、『集史』の記述がそのまま受容されたわけではなかった。ラシードの息子ギヤース・アッディーン Ghiyāth al-Dīn に献呈されたムスタウフィー著『選史』には次のようにある。

セルジュークは、アフラーシヤーブの種 tukhm-i Afrāsiyāb たるキニクというトルコ諸族の一集団 qawm-i turkān-i QYQ に属する。またアブー・アルアラ・アフワルの『歴史』には、「彼〔セルジューク〕は34代を経てアフラーシヤーブに至る」⁽²⁷⁾とある。

ムスタウフィーは、『集史』を『選史』の典拠の一つとして挙げており⁽²⁸⁾、セルジュークの出自をキニク氏族とする点は、『集史』を参照したと考えられる。しかし、ムスタウフィーはキニク氏族をアフラーシヤーブの末裔に位置付け、さらにこの説を補強するために、サンジャルの治世に活躍したアブー・アルアラ・アフワルの歴史書を引用する。ここでは、全く異なる背景で用いられていた二つの起源が統合され、キニクというトルコ系の一氏族が、アフラーシヤーブという伝説上のトルコの王の血統の中に位置付けられる。その一方で、ムスタウフィーは、『集史』にあるセルジュークの遠祖が「天幕の骨組み職人」である点については、口を閉ざしている。同様の記述は、後世の史料にも散見される(表2:250-1, 253, 254, 261, 264, 266, 273-1)。

iii) アフラーシヤーブ起源単独

イル・ハーン朝後には、ムスタウフィーからの引用と明記しながらも、キニク氏族起源という記述だけを削除し、アフラーシヤーブ起源にしか言及しない歴史家も現れる。その代表的歴史家が『伝記の伴侶 *Ḥabīb al-Siyar*』⁽²⁹⁾を著したハーンダ・ミール Khwānd-Amir である。その後も同様にアフラーシヤーブ

起源にしか言及しない史料が数事例確認できる（表2：267, 268）。このように後世には、キニク氏族起源を削除する歴史家まで出現する。

3. ペルシア語王朝史におけるセルジューク朝の起源

さて、ここまでセルジューク朝の起源に関する叙述の分析対象としてきたのは、普遍史であった。セルジューク朝の諸王の事跡を叙述した王朝史は、ルームにその地方政権が存続したため（1075-1308）、引き続き執筆されていた。しかし興味深いことに、これら王朝史の中には、キニク氏族やアフラスィヤブに言及した史料はない。ここでは、王朝を称揚するために書かれた史料で如何なる起源が主張されていたのかを確認したい。

ルーム・セルジューク朝君主カイフスラウ（r. 1192-96, 1205-11）に献呈された『胸臆の安息』において、王朝の起源は次のように記されている。

セルジューク家の王権 *mulk-i āl-i Saljūq*。その始まりは、勝利のスルターン・ギヤース・アッドウンヤー・ワッディーン *Sultān-i Qāhir Ghiyāth al-Dunyā wa al-Dīn* [カイフスラウ] の7代祖イスラーイール・ブン・セルジュークからであった。⁽³⁰⁾

このようにラーワンディーは、ルーム・セルジューク朝君主の直系の父祖にあたるセルジュークの息子イスラーイールまでしか系図を遡らせていない。またこれ以外の箇所では、カイフスラウを「マリク・シャーの王権・王冠・王座の相続者」⁽³¹⁾と叙述するなど、既に滅亡したセルジューク朝の後継者にルーム・セルジューク朝の君主は位置付けられる。⁽³²⁾しかしその一方で、セルジューク朝のそもそもの出自には少しも関心が払われていない。

同様の傾向は、アナトリアで著された史料やその影響を受けた史料群に見られる。ニイデ出身のカーディー・アフマド *Qāḍī Aḥmad* により著され、イル・ハーン朝君主アブー・サイード（r. 1316-35）に献呈された『慈悲深き息子 *Walad-i Shafīq*』では、セルジューク朝君主ムハンマド（r. 1105-18）の息子がルーム・セルジューク朝の始祖スライマーン（r. 1077-86）とされるなど、13世紀以降には明らかに史実を改竄した形で、セルジューク朝と「直接の」血縁関係を主張する史料が散見されるようになる。⁽³³⁾

このように、ルーム・セルジューク朝期以降に書かれた王朝史で主張されるのは、セルジューク朝との関係やその血縁であり、「セルジューク家」の一員た

ることであった。そのため、セルジューク朝の起源が問題とされることはなかったのである。

IV. ペルシア語普遍史と王朝の起源

前章では、セルジューク朝の起源が問題とされるのは、ペルシア語普遍史という史料群に共通する傾向であり、アラビア語史料全般やペルシア語王朝史ではその傾向が見られないことを確認した。本章では、ペルシア語普遍史の構成におけるセルジューク朝史の位置付けを明らかにしたい。この問題を考える際に参照しなければならないのが、ペルシア語普遍史における「オグズ史」の位置付けを明快に解き明かした宇野伸浩による研究である。宇野は普遍史叙述におけるトルコ諸民族の系譜の変遷を分析し、『集史』において、トルコとモンゴルの系譜に関連を持たせること（「オグズ史」の導入）により初めて、アダムに始まる諸民族の系譜にモンゴルが矛盾なく組み込まれたことを明らかにした。⁽³⁴⁾ 本稿では、宇野が明らかにした「トルコ諸民族の系譜」の問題に加え、アフラーシヤーブが登場する「古代イラン史」叙述がペルシア語普遍史において如何なる役割を果たしたのかを検討したい。ここでは、モンゴル時代以降のセルジューク朝史叙述の「祖形」となる『集史』と『選史』を比較することにより、普遍史中における起源や評価の変容を明らかにする。近年、ペルシア語普遍史の性質を再考する研究が増えてきているが、本章での議論もそれらの研究に寄与するものと位置付けられる。⁽³⁵⁾

1. 『集史』におけるセルジューク朝の位置付け

ラシードは『集史』総序文で、自著の構成を第1巻「モンゴル史」、第2巻「世界史」、そして第3巻「地理誌」と叙述しているが、現在この形状を保持した写本は確認されていない。第3巻は散逸しており、各国の図書館に残る第1巻と第2巻の合冊本も、そのほとんどは、第2巻が冒頭に来るという形式を有するからである⁽³⁶⁾（図1）。これは、13世紀後半以降のペルシア語普遍史に特有の「イランの諸王朝」の項目の最後に「モンゴル史」が設けられる構成と共通している⁽³⁷⁾（表3）。つまり、ペルシア語普遍史としては「特殊な構成」で叙述された『集史』は、後世書写される際に、その構成を変え、後世に伝えられたのである。また『集史』の特異な点は、その巻構成だけに留まらない。「イランの諸王朝」

巻	章立て
第一巻「世界史」	預言者／古代イラン史
	イスラーム史（ムハンマド／カリフ史）
	ガズナ朝史
	セルジューク朝史
	ホラズムシャー朝史
	サルグル朝史
	イスマール派史
	オグズ史
	中国史
	ユダヤ史
	フランク史
	インド史
「モンゴル史」	総序文
	第1部「トルコ・モンゴル諸部族史」
	第2部「モンゴルやトルコなどの諸王史」
	・第1章「チンギス・ハーンの祖先の歴史」 ・第2章「チンギス・ハーンとその末裔の歴史」

図1：『集史』の構成（ロンドン・英国図書館 Add. 7628）

と分類される王朝が、ガズナ朝、セルジューク朝、ホラズムシャー朝、サルグル朝、そしてイスマール派に限定される。ここには、他の普遍史に必ず採用されるサッフアール朝、サーマーン朝、そしてブワイフ朝の項目は存在しない。『集史』に大きな影響を受けた史書とされるバナーカティー Banākātī 著『バナーカ

⁽³⁸⁾ *nākātī*』でさえも、「中国史」や「フランク史」を採用した点では『集史』に共通するものの、「イランの諸王朝」史の章構成は『集史』のそれとは大きく異なっている。

以上のような章構成を持つ『集史』における諸王朝の出自に着目すると、興味深い傾向が見られる。イスマール派以外の諸王朝の出自について、ガズナ朝はカイ氏族、セルジューク朝はキニク氏族、ホラズムシャー朝はバヤンド

	サッフアール朝	サーマーン朝	ガズナ朝	ブワイフ朝	セルジューク朝	ホラズムシャー朝	サルグル朝
『集史』			カイ氏族 (オグズ)		キニク氏族 (オグズ)	バヤンドル 氏族 (オグズ)	サルグル 氏族 (オグズ)
『選史』		バフラー ム・チュ ービー ン (古 代イ ラン 史)		バフラー ム・グ ール (古 代イ ラン 史)	キニク 氏族 (オ グズ) アフ ラッ シー ヤ ーフ (古 代イ ラン 史)	トルコ	ター ク ・ハ ーン (オ グズ)
『諸系譜集』			トルコ	アラブ	トルコ マーン (ウイ グル)	トルコ	トルコ マーン

図2：ペルシア語普遍史におけるイランの諸王朝の起源

* Rashīd al-Dīn, *Jāmi' al-Tawārīkh: Tārīkh-i Ughūz*, ed. by M. Rawshan, Tehran, 1384Kh.; Ḥamd-Allāh Mustawfī, *Tārīkh-i Guzīda*, ed. by 'A. Nawā'ī, Tehran, 1364Kh.; Shabānkārā'ī, *Majma' al-Ansāb*, ed. by M. H. Muḥaddith, 2 vols., Tehran, 1363-81Kh. より作成。
* 図中の「×」は起源に関するが言及しないこと、「/」は章が設けられていないことを意味する。

ル氏族、そしてサルグル朝はサルグル氏族と、いずれもオグズの一族とされている(図2)⁽³⁹⁾。このように、ラシードが項目を立てた王朝は、いずれも「オグズ史」の項目でオグズの系譜に位置付けられる王朝なのである。さらにラシードは、サーマーン朝の始祖サーマーン・フダーに関しても、次のように説明している。

彼の死後、アスィール・ザーダ Aṣīl-Zāda がマー・ワラー・アンナフルで
[オグズの] 王として推戴された。彼は、サーマーン朝の歴史においては、
サーマーン・フダーと呼ばれる、全サーマーン家の祖 pidar である。⁽⁴⁰⁾

このようにラシードは、イランに興った諸王朝の出自を全てオグズとみなしていた。『集史』におけるオグズの諸王に対する認識は次の記述に最もよく表れている。

オグズと彼の息子たちの後の長い期間・多くの年月、その諸部族 aqwām から出た多くの諸王がいた。各時代に、既述のこれら24氏族から有力で権力を有する王が現れ、長きに亘り王位はその一門にあった。[中略] 彼ら [オグズ部族] の命令や統治は、このイランの地に達し、この地域には、オグズ部族に属する、大変に名高く、著名で、権威ある、諸王や大將軍たちがいる。しかしながら、誰もが、彼らがオグズの末裔であることを知っているわけではない。その一方、トルコマーンの集団は、各王や各將軍がこの部族のどの氏族の出身なのかをはっきりと知っている。高貴にして偉大な王であり、トゥランとイランの領域で約400年間王位を執り、エジプト地方との境から中国との境に至るまでを彼らの支配下においた、セルジューク家のスルターンたちやその祖先たちはキニク氏族に属する。⁽⁴¹⁾

このように、ラシードは「イランの諸王朝」の出自をオグズに求め、その出自については万人に周知のものではないと考えていた。その内容を詳細に記録するため、『集史』では、「モンゴル」だけでなく、「イランの諸王朝」までもがオグズ・ハーンに連なる系譜に関連付けられたのである。このことは、他の普遍史とは異なり、『集史』においてはオグズの系譜を持たないブワイフ朝やサッファール朝が「イランの諸王朝」として扱われていないことから裏付けられる(表3)。

セルジューク朝に対する評価に関してここでは、400年という長い統治期間とエジプトとの境から中国との境までという広大な領域を支配した点が称揚され

るのみで、その出自を高く評価する言及はない。さらに、キニク氏族に対する評価を考える上で重要なのは、「オグズの末裔の諸王は次の5人の息子から出た。第一にカイ、ヤゼル、イムル、アフシャール、バヤンドル。この種の後には王は⁽⁴²⁾いない」という記述である。ここではオグズの諸王にキニク氏族は数えられておらず、オグズ24氏族中においてその地位は指導者とみなされていないことが分かる。ここからは、カーシュガリーがキニク氏族に与えたような高い評価は見られない。つまり、『集史』においてキニク氏族が言及されたのは、その出自が高貴だという点を強調するためではなく、オグズの系譜に基づく普遍史を叙述するためであった。前章で確認したように、セルジューク家の祖は「天幕の骨組み職人」にすぎなかった。

2. 『選史』におけるセルジューク朝の位置付け

ラシードの『集史』がオグズの系譜に基づく普遍史であったのに対して、『選史』の章構成には、ペルシア語普遍史叙述に共通する「サッフアール朝史」や「ブワイフ朝史」の項目が設けられている（表3）。さらに『集史』とは大きく異なり、その出自がオグズ部族とされるのは、セルジューク朝とサルグル朝だけに限られる（図2）。このような諸王朝の出自に対する評価に関して、『選史』には次のような記述がある。

イスラーム期 ‘ahd-i Islām に存在した君主たちは、各々何らかの不名誉により汚れていた。例えば、ウマイヤ朝はザンダカ主義とムッタズィラ派 i’tizāl とハーリジー思想により、アッバース朝の一部はムッタズィラ派により、サッフアール朝とブワイフ朝は異端 rafḍ により、ガズナ朝とホラズムシャー朝とサルグル朝は血筋の卑しきにより。しかし、セルジューク朝はこれらの不名誉から清浄で、スenna派で、正しき宗教の持ち主で、良き信仰の持ち主で、善行の所有者で、民衆に対して慈悲深かった。この祝福のため、彼らの治世には、彼らを脅かすようないかなる反乱者も出現しな⁽⁴³⁾かった。

ここでムスタウフィーは、セルジューク朝に対して極めて高い評価を与え、その根拠として思想、宗教、血統の良さ、善政の施行者であることを挙げている。彼はオグズの血統を評価の対象とはせず、オグズの末裔とされるサルグル朝も出自の卑しい王朝の一つとする。その一方でセルジューク朝に関しては、キニ

ク氏族をアフラスィヤーブの末裔とすることにより、古代イランより続く血統を保証している。このように、『選史』の叙述の特徴は、「イランの諸王朝」の出自が古代イランの諸王と関係付けられる点にある。セルジューク朝以外では、サーマーン朝がバフラーム・チュービーンの末裔、そして、ブワイフ朝はバフラーム・グールの末裔とされ⁽⁴⁴⁾、この3王朝の血統を卑しめる記述はない。もちろんこれらの言説は『選史』以前にも存在していたが、体系的に「イランの諸王朝」と「古代イラン史」を関係付けて叙述した史料は『選史』が最初⁽⁴⁵⁾と考えられる⁽⁴⁶⁾。

V. ペルシア語普遍史叙述の展開と二つの人類史叙述

前章で確認したように、普遍史の構成に関して、『集史』では「オグズ史」が、『選史』では「古代イラン史」が重要な役割を果たしていた。『集史』と『選史』⁽⁴⁷⁾の写本は、後世に多数作成され、ペルシア語以外にも翻訳されるなど、イル・ハーン朝後の普遍史叙述に大きな影響力を持った。しかしながら、セルジューク朝の起源について『集史』の内容をそのまま採用したのは、『集史』編纂にかかわったカーシャーニーを除いては、ラシードに依拠して大部な普遍史を残した、ティームール朝期の歴史家ハーフィズィ・アブルー Ḥāfiz-i Abrū のみである⁽⁴⁸⁾。その一方で、『選史』に倣い二つの出自を併記する史料の数は多い(表2：250-1, 253, 254, 261, 264, 266, 273-1)。またもう一つの傾向として、キニク氏族に触れず、アフラスィヤーブ起源だけを叙述する史料も後世に現れる(表2：262-3, 267, 268)。このように、セルジューク朝の起源に関しては、圧倒的に『選史』の記述が後世の歴史家に好まれる傾向にある。最後に、アフラスィヤーブ起源が好まれた原因とセルジューク朝に対する評価の関係について論じたい。

ラシードがキニク氏族起源を採用した理由は、オグズの系譜に基づいた人類史を叙述するため、セルジューク朝の起源に強い関心を持っていたわけではなかった。更に言えば、ラシードの普遍史は、伝統的なペルシア語普遍史叙述の系譜の中では異色の作品であった。『集史』では、「オグズ史」に登場するオグズの諸王を説明する際、普遍史に登場する人物との年代比定が行われる。例えば、「ガズナ朝史」冒頭に組み込まれたオグズの系譜においては、預言者ムハンマドの時代にはトゥグリル Ṭughril が、教友の時代にはトゥーカーク Tūqāq

オグズの王	普遍史における位置付け
ديب ياقوي	
数世代略	
トゥグリル	ムハンマドと同時代
トゥーカーク	教友たちと同時代
دوقور ياقوي	
سامان ياقوي (=サーマーン・フダー)	サーマーン朝の祖
غم ياقوي	
كوكم ياقوي	
سرنگ	
サブク・ティキーン (カイ氏族)	ガズナ朝の祖
マフムード	

図3：オグズの王の普遍史における位置付け

* Rašīd al-Dīn Faḡlallāh, *Cāmi' al-Tawārīḡ*, ed. by A. Ateş, Vol. 2-4, Ankara, 1999, 3-5 より作成。

ア語普遍史の最大の特徴は、ピーシュダード、カヤーン、アシュカーン、サーサーンの4王朝の歴史（『古代イラン史』）がイスラーム史以前に組み込まれている点にある（表3）。例えば『集史』に先行して書かれた『歴史の秩序』では、ピーシュダード朝の創始者カユーマルスはノアの子孫（別説としてアダム、或いはセツの兄弟）に比定され、ダッハークはアブラハムと、マヌーチフルはモーセといった預言者と同時代人に位置付けられる。⁽⁵⁰⁾このように、既にペルシア語普遍史叙述では、「古代イラン史」に登場する諸王を、如何に『クルアーン』などに見られる旧約聖書の言説の中に位置付けるのかが問題とされていた。そして14世紀になると、「オグズ史」が新たな要素としてペルシア語普遍史の中に組み込まれたのである。

ムスタウフィーは自著『選史』の「オグズ史」を、「殉教せし幸運な主人ハージャ・ラシード・アルハック・ワッディーン Khwāja Rashīd al-Ḥaqq wa al-Dīn ——彼ノ墓土ガ芳シカランコトヲ——の著書『集史』には次のように記されている⁽⁵¹⁾」と始めるが、その内容は完全な引用ではなく、ムスタウフィーによる書替えや増補が確認できる。その中では、「ある者は、オグズ・ハーンをアフラーシヤーブと見做すが、これは根拠 *aṣl* を持たない⁽⁵²⁾」であるとか「ファリードゥーンの時代に、その息子トゥールは彼ら〔オグズ・ハーンの末裔〕と大合戦を行った⁽⁵³⁾」といった具合に、「オグズ史」が「古代イラン史」の文脈の中で説明されている。特に前者の引用部は、根拠がないと留保されているが、セル

が、といった具合に普遍史中の人物との関係が説明されている（図3）⁽⁴⁹⁾。

しかしラシードによる年代比定は、預言者ムハンマド以降の記述に限られており、ヤベテからオグズ・ハーンが出たという記述を除き、イスラーム史以前の普遍史における「オグズ史」の位置付けは不明瞭なままである。ところで、ペルシ

ジューク朝の起源であるキニク氏族とアフラスィヤーブの関係を考える上では重要な指摘である。オグズ・ハーンとアフラスィヤーブを同一人物に比定することで、オグズ・ハーンの末裔にあたるキニク氏族をアフラスィヤーブの末裔と解釈することが可能になる。但し、ここでは留保されていることから、これは一般的な言説ではなかったと考えられる。このようにラシードによる「オグズ史」中心の普遍史は、ムスタウフィーにより形を変えられて、後に続く歴史家⁽⁵⁴⁾に継承されていったのである。

さらに指摘できるのは、後世におけるセルジューク朝に対する評価の高さである。『選史』の流れを汲む史料ではアフラスィヤーブ起源を叙述する際、⁽⁵⁵⁾「その崇高な系譜はめでたきファリードゥーンに至る」という加筆までなされ、世界を征服し三分割した「古代イラン史」の英雄ファリードゥーンにまで至るセルジューク朝の起源が叙述される。このように、セルジューク朝を高く評価する『選史』の叙述が好まれ、再生産された結果、その評価が定着することになったのである。実際、先に引用した、セルジューク朝をイランの諸王朝の中で最も良き王朝とするムスタウフィーの記述をそのまま引用する歴史家も多い（表2：250-1, 261, 264, 266）。またイル・ハーン朝後には、セルジューク朝の起源を叙述する際のもう一つの傾向として、『清浄園』に引用された『王の書』から派生した記述が多く採用されるようになることが指摘できる。これは、セルジュークの父の名前が「ルクマーン」型から「ドゥカーク」型へと突然変化することからも明白である（表2：260, 262-1, 262-2, 262-3, 263, 272, 273-2, 274, 275, 277, 278）。『王の書』では、ドゥカークはハザル・トルコの王と同列に扱われている。このような王朝史像が定着していく一方、その起源を「天幕の骨組み職人」と叙述する『集史』の記述が採用される事例は極めて少なかったのである。

VI. おわりに

以上の検討より、次の諸点が明らかとなった。

1. セルジューク朝の出自がオグズ部族に属するキニク氏族であることが再確認されたが、その位置付けは訂正されなければならない。カーシュガリー以外の同時代の知識人はキニク氏族に関する記述を残しておらず、王朝自身もこの出自により王統を正当化している様子はない。むしろ同時代に主張されてい

たのは、後に主張されるようになったアフラスィヤーブとの紐帯であった。

2. キニク氏族起源に言及する史料は、ラシードの『集史』以降多数見られるようになるが、その出自に関する評価は同時代のカーシュガリーのそれとは違い、「天幕の骨組み職人」という決して高くないものであった。このような記述は後世の歴史家には好まれず、そのほとんどがアフラスィヤーブの末裔にキニク氏族を位置付ける形で伝えられた。しかも後世には、キニク氏族起源を削除し、アフラスィヤーブ起源のみに言及する歴史家さえ現れる。

3. 歴史家がアフラスィヤーブ起源を選択するようになった背景には、ペルシア語普遍史という史料体系の存在があった。その中で必要不可欠な要素は「古代イラン史」の項目であったため、「イランの諸王朝」と「古代イラン史」との連続性を重んじた『選史』の叙述が好まれたのである。そのために『選史』は、イル・ハーン朝後の歴史叙述において「イランの諸王朝」を叙述する際に数多く引用されることになる。

4. このように『選史』の叙述が好まれたことは、セルジューク朝に対する評価の形成にも大きな影響を与えた。というのも、『選史』こそがセルジューク朝に対して最大の賛辞を与えた歴史書であったからである。その叙述が再生産されることにより、セルジューク朝を良き王朝とみなす評価が定着することになった。

本稿では、ペルシア語普遍史叙述の展開とセルジューク朝の起源認識との関連について論じた。しかしながら、ペルシア語普遍史におけるその他の項目、特に「古代イラン史」の項目が全体の中でどのような位置を占めているのかについては未だ本格的な研究がなされていない。ペルシア語普遍史の構成のその他の部分に関しては今後検討していきたい。

付記：本研究は、文部科学省科学研究費補助金（特別研究員奨励費）による史料調査の成果の一部である。また史料調査に際しては、多くの方々のお世話になった。ここに記して謝意を表したい。

注

- (1) C. E. Bosworth, “Saldhūkids,” *The Encyclopaedia of Islam*, new ed., Vol. 8, Leiden, 1995, 938a.
- (2) İ. Kafesoğlu, *A History of the Seljuks*, trans. by G. Leiser, Illinois, 1988 (1964-65), 22.

- (3) 例えば後述するように(注20)、イブン・ハッスールがアフラスィヤーブ起源説を唱えたという「定説」の再検討を試みた研究は管見の限り存在しない。セルジューク朝の起源についての専論には、S. A. Hasan, “Some Observations of the Problems Concerning the Origin of the Saljūqids,” *Islamic Culture* 39-3 (1965), 195-204 などがあるが、これも同様である。
- (4) トガンはキニク氏族の祖について、トルコ系英雄叙事詩における伝説上のトルコの王オグズ・ハーンとする「オグズ史 *Oghuz-Nāma*」とイブン・ファドラーン Ibn Faḍlān の旅行記に登場する人名を照合して、系譜を再構成した (Z. V. Togan, *Umumî Türk Tarihine Giriş*, Istanbul, 1981 (1946), 183-186)。「オグズ史」の内容については、本田実信・小山皓一郎「オグズ=カガン説話1」『北方文化研究』7 (1973), 19-63 を参照のこと。
- (5) İ. Kafesoğlu, *Selçuklu Ailesinin Menşei Hakkında*, Istanbul, 1955.
- (6) N. Ahmad, *Religion and Politics in Central Asia under the Saljūqs*, Srinagar, 2003, 2-3.
- (7) 最近まで、トゥグリル3世 (r. 1176-94) に献呈された王朝史、ニーシャープーリー Nishāpūrī 著『セルジュークの書 *Saljūq-Nāma*』の冒頭にも、キニク氏族に起源を求める記述があると考えられていた。しかし、これまで使用されていた刊本は後世の史料からの復元にすぎず、モートン A. H. Morton による写本発見・刊本出版 (Nishāpūrī, *The Saljūqnāma of Zahir al-Dīn Nishāpūrī*, ed. by A. H. Morton, Cambridge, 2004) の結果、当該部分は後世 (14世紀初頭) の加筆であることが明らかとなった (拙評「ザヒール・アッディーン・ニーシャープーリー著 (A. H. モートン校訂)『セルジューク朝史』」『東洋学報』87/4 (2006), 33)。
- (8) Kāşgarlı Mahmud, *Divānū Lūgati't-Türk*, ed. by K. Düzenci & Ü. Yüksel, Ankara, 1990, 20b. 訳文中の角型括弧は筆者による補足を意味する (以下同じ)。
- (9) Abū al-'Alā b. Ḥassūl, “*Kitāb Tafḍīl al-Atrāk*,” ed. by A. Azzavī, *Belleten* 4 (1940), 49.
- (10) 『セルジュークの書』には、「系譜がない」という理由により、ガズナ朝君主の王権が否定される場面が叙述されている (Nishāpūrī, *The Saljūqnāma*, 8)。
- (11) セルジューク朝君主の貨幣に刻まれた弓矢の形をキニク氏族のタムガの崩れた形とする説もあるが (Kafesoğlu, *A History of the Seljuks*, 22), 貨幣に刻まれた形を確認してみると、むしろ『トルコ語集成』に記されたサルグル氏族のタムガの形に酷似している (C. Alptekin, “Selçuklu Paraları,” *Selçuklu Araştırmaları Dergisi* 3 (1971), 443; Kāşgarlı, *Divānū*, 20b)。そのため、この弓矢の形はむしろ、清水宏祐のように、トルコ系諸部族の支配者であることの象徴と考えるべきであろう (清水宏祐「貨幣史料によるセルジューク朝史研究序説：ピュリエット説にたいする一見解」『イスラム世界』25・26 (1986), 103-128)。
- (12) この史料の性格については, Cl. Cahen, “Le Malik-Nameh et l’histoire des

- origines seljukides,” *Oriens* 2-1 (1949), 31-65 を参照のこと。次の3史料には『王の書』からの直接引用が明記されている。Ibn al-‘Adīm, *Buġyat at-Ṭalab fī Tārīḥ Ḥalab*, ed. by A. Sevim, Ankara, 1976, 32; Bar Hebraeus, *The Chronography of Bar Hebraeus*, trans. by E. A. W. Budge, Vol. 1, Amsterdam, 1976, 195; Mīr-Khwānd, *Rawḍat al-Ṣafā*, ed. by J. Kiyānfar, Vol. 6, Tehran, 1380Kh., 3119.
- (13) この訳語は、アラビア語史料から『王の書』の記述を復元した研究では「鉄弓」と訳出される箇所である (Hasan, “Some Observations,” 198)。
- (14) Mīr-Khwānd, *Rawḍat*, Vol. 6, 3119. 本稿では、『王の書』を最も詳細に引用しているミール・ハーン Mir-Khwānd 著『清浄園 *Rawḍat al-Ṣafā*』を利用した。
- (15) Ibn al-Athīr, *al-Kāmil fī al-Ta’rīkh*, ed. by C. J. Tornberg, Vol. 9, Beirut, 1966, 473.
- (16) Mīr-Khwānd, *Rawḍat*, Vol. 6, 3119-3121.
- (17) Nizām al-Mulk, *Siyyar al-Mulūk*, ed. by H. Darke, Tehran, 1372Kh., 13.
- (18) Muntajab al-Dīn al-Juwaynī, *Kitāb ‘Atabat al-Kataba*, ed. by M. Qazwīnī & ‘A. Iqbāl, Tehran, 1329Kh., 33.
- (19) J. S. Meisami, *Persian Historiography: To the End of the Twelfth Century*, Edinburgh, 1999, 269.
- (20) 先行研究では、アブー・アルアラーはトゥグリル・ベクの官吏イブン・ハッスールに同定されてきた (Bosworth, “Salḍhūkids,” 938a)。しかし彼の経歴に関する唯一の情報には、「サンジャルと同時代人」 (Ḥamd-Allāh Mustawfī, *Tārīkh-i Guzīda*, ed. by ‘A. Nawā’ī, Tehran, 1364Kh., 690) とあるため、この人物は1058年没のイブン・ハッスールとは別人であると考えざるをえない。
- (21) Mustawfī, *Guzīda*, 426.
- (22) (表1)(表2)から分かるように、セルジュークの父の名前には、点の位置や数などに史料間で様々な異同が見られる。本稿では、「ルクマーン Luqmān」と読めない方の形を便宜的に一括して「ドゥカーク」型と表記する(表には元の形のまま表記)。この問題に関しては、井谷鋼造「セルジューク朝の名祖セルジュークの父の名 Duqāq/Luqmān について」『創立三十周年記念論集(文学部篇)』追手門学院大学, 1997, 1-22 を参照のこと。
- (23) al-Ḥusaynī, *Akhbār al-Dawlat al-Saljūqīya*, ed. by Z. M. Buniatov, Moscow, 1980, 2b; al-‘Aynī, *Iqd al-Jumān*, イスタンブル・トプカプサライ博物館付属図書館 Ahmet III 2911a, Vol. 10, 224b.
- (24) 唯一の例外として、セルジューク朝の起源をサーサーン朝に求める史料が存在する (Ibn al-Dawādārī, *Kanz al-Durar wa Jāmi‘ al-Ghurur*, ed. by Ş. al-Munajjid, Vol. 6, Cairo, 1961, 336)。
- (25) Raṣīd al-Dīn Faḡlallāh, *Cāmi‘ al-Tavārīḥ*, ed. by A. Ateş, Vol. 2-5, Ankara, 1999, 5. ラシードの『集史』編纂作業に加わっていたカーシャニー Kāshānī による普遍史『歴史精髄 *Zubdat al-Tawārīḥ*』にもほぼ同様の記述がある (Nishāpūrī, *Saljūq-Nāma*, ed. by I. Afshār, 1332Kh., 10)。

- (26) 但し、ラーワンディー Rāwandī が著したセルジューク朝史『胸臆の安息 *Rāḥat al-Ṣudūr*』(1206年頃完成)のバリ写本(1238年書写)の欄外には、書写生とは別の筆で “b. Duqāq al-Qiniqī” という書込があり (Rāwandī, *Rāḥat al-Ṣudūr*, バリ・国立図書館 Suppl. Persan 1314, 37b), 加筆の年代によっては、バリ写本の書込の方が古い事例という可能性もある。
- (27) Mustawfī, *Guzīda*, 426.
- (28) 『選史』には、『集史』を含む23史書が典拠として列举されている (Mustawfī, *Guzīda*, 6-7)。
- (29) Khwānd-Amīr, *Ḥabīb al-Siyar*, ed. by J. Humā'ī & M. Dabīr-Siyāqī, Vol. 2, Tehran, 1353Kh., 479.
- (30) Rāwandī, *Rāḥat*, 28b.
- (31) Rāwandī, *Rāḥat*, 58b.
- (32) 詳しくは、同様の事例を集めた井谷鋼造の研究を参照のこと (井谷鋼造「大セルジューク朝」と「ルーム・セルジューク朝」『西南アジア研究』41 (1994), 49)。
- (33) Qāḍī Aḥmad, *Walad-i Shafīq*, イスタンブル・スレイマニエ図書館 Fatih 4518, 151a. また、15世紀半ばにアナトリアで著された普遍史では、カイフスラウはアルプ・アルスラーンの息子とされる (Shukr-Allāh, *Bahjat al-Tawārikh*, バリ・国立図書館 Suppl. Persan 1120, 146a)。
- (34) 宇野伸浩『『集史』の構成における「オグズ・カン説話」の意味』『東洋史研究』61/1 (2002), 34-61。
- (35) 最近の代表的研究として、バイダーウィー Baydāwī 著『歴史の秩序 *Nizām al-Tawārikh*』を扱った次のものが挙げられる。井谷鋼造「Aya Sofya 3605 ペルシア語写本 *Nizām al-Tawārikh* 中のセルジューク朝関連の記事について(上)・(下)」『追手門学院大学文学部紀要』31・32 (1995・1997), 1-15・1-28; Ch. Melville, “From Adam to Abaqa: Qāḍī Baiḍāwī's Rearrangement of History,” *Studia Iranica* 30 (2001), 67-86.
- (36) Rashīd al-Dīn, *Jāmi' al-Tawārikh*, ed. by M. Rawshan & M. Mūsawī, Vol. 1, Tehran, 1373Kh., 15-20.
- (37) 白岩一彦「ラシード・ウッディーン『歴史集成』現存写本目録」『参考書誌研究』53 (2000), 27-31。この目録によれば、最古の第1・2巻合冊写本の書写年は1407年。
- (38) E. G. Browne, *A Literary History of Persia*, Vol. 3, Cambridge, 1964 (1920), 100-101.
- (39) Rashīd al-Dīn, *Jāmi' al-Tawārikh: Tārīkh-i Ughūz*, ed. by M. Rawshan, Tehran, 1384Kh., 93-95。ここでガズナ朝の出自とされるカイ氏族は、通常はオスマン朝の出身氏族とされている。
- (40) Rashīd, *Jāmi' Ughūz*, 91-92.
- (41) Rashīd, *Jāmi'*; Rawshan & Mūsawī, Vol. 1, 62.
- (42) Rashīd, *Jāmi' Ughūz*, 94-95.

- (43) Mustawfī, *Guzīda*, 426.
- (44) Mustawfī, *Guzīda*, 376, 409.
- (45) C. E. Bosworth, “The Heritage of Rulership in Early Islamic Iran and the Search of Dynastic Connections with the Past,” *Iran* 4 (1966), 51-62.
- (46) 『選史』の典拠となったペルシア語普遍史は、『歴史の秩序』、『集史』、『歴史精髓』、『パナーカティー史』の4作品だが、この中では僅かに『歴史の秩序』がブワイフ朝の起源をバフラーム・グールとする説を伝えているだけである (Bayḍāwī, *Nizām al-Tawārīkh*, ed. by M. H. Muḥaddith, Tehran, 1381Kh., 99)。また、『選史』と同じくギヤース・アッディーンに献呈されたシャバーンカーライー Shabānkārā'ī 著『諸系譜集 *Majma' al-Ansāb*』では、ブワイフ朝の出自はアラブ、セルジューク朝の出自はウイグルとされるなど (Shabānkārā'ī, *Majma' al-Ansāb*, ed. by M. H. Muḥaddith, Vol. 2, Tehran, 1363Kh., 89; Shabānkārā'ī, *Majma' al-Ansāb*, ed. by M. H. Muḥaddith, Vol. 1, Tehran, 1381Kh., 51), 諸王朝の起源に関してオグズの系譜や古代イランの諸王の系譜が重視されない歴史書も存在する (図2)。
- (47) 『集史』は72の、『選史』は95の写本の存在が確認されている (Melville, “From Adam to Abaqa,” 73; 白岩『『歴史集成』現存写本目録』, 2)。
- (48) Ḥāfiẓ-i Abrū, *Majmū'a-yi Ḥāfiẓ-i Abrū*, イスタンブル・スレイマニエ図書館 Damad Ibrahim Paşa 919, 573b.
- (49) Raṣīd al-Dīn Faẓlallāh, *Cāmi' al-Tawārīkh*, ed. by A. Ateş, Vol. 2-4, Ankara, 1999, 3-5. ここで登場するトゥグルルはオグズの王であり、セルジューク朝のトゥグルル・ベクとは別人である。
- (50) Bayḍāwī, *Nizām*, 14-15. ちなみに、『歴史の秩序』におけるカエサルスの位置付けに関しては、井谷鋼造による専論がある (井谷鋼造「近世ペルシア語の世界史 *Nizām al-Tawārīkh* についての古典文学的研究 I」『『古典学の再構築』第1期公募研究論文集』2001, 30-36)。
- (51) Mustawfī, *Guzīda*, 562.
- (52) Mustawfī, *Guzīda*, 566.
- (53) Mustawfī, *Guzīda*, 562.
- (54) 既にティームール朝期の歴史叙述研究の立場から、モンゴルの慣習を重視するか否かで後世の歴史叙述は『集史』と『選史』の二系統に分岐していくという説が出されているが (M. Dobrovits, “The Turco-Mongolian Tradition of Common Origin and the Historiography in Fifteenth Century Central Asia,” *Acta Orientalia* 47-3 (1994), 269-277), 「イランの諸王朝」史の部分に限れば、『集史』の後世の史家に対する影響力は極めて小さい。また『選史』を、『王書 *Shāh-Nāma*』の続編として編まれた韻文普遍史『勝利の書 *Zafar-Nāma*』の「要約版」と見なす研究もあり (Ch. Melville, “Ḥamd Allāh Mustawfī's *Zafarnāmah* and the Historiography of the Late Ilkhanid Period,” *Iran and Iranian Studies*, ed. by K. Eslami, Princeton, 1998, 1-12), そのために、『選史』で

は「古代イラン史」との関係が特に重視されたと考えられる。

- (55) Mas'ūd Qūhistānī, *Tārīkh-i Abū al-Khayr-Khānī*, ロンドン・英国図書館 Add.26188, 190a.

表1 アラビア語史料におけるセルジューク朝の起源

著者名	史書名	執筆年	書誌情報	キニク氏族	ヤーフラースイ	セルジューク
王朝	'Imād al-Dīn al-Isfahānī	1183年	バリ・国立図書館 Suppl. Arabe 772, 2a.	×	×	×
史	al-Bundārī	1226年	Y. Marād(ed.), Beirut, 2004, 184.	×	×	×
	Anon.	1225年以降	Z. M. Buniatov(ed. & tr.), Moscow, 1980, 2b.	○	×	×
	Ibn al-Jawzī	1179年以降	M. 'A. 'Aḡā & M. 'A. 'Aḡā(eds.), Vol. 15, Beirut, 1992, 267.	×	×	×
	Ibn al-Athīr	1231年以降	C. J. Tornberg(ed.), Vol. 9, Beirut, 1966, 473.	×	×	×
	Sibṭ b. al-Jawzī	1256年	イスタンブル・トプカプサライ博物館付属図書館 Ahmet III 2907b, Vol. 12, 91b.	×	×	×
普通	Abū al-Fida'	1329年以降	M. Dayyūb(ed.), Vol. 1, Beirut, 1997, 517.	×	×	×
史	Ibn al-Dawādārī	1335年	Ş. al-Munajjid(ed.), Vol. 6, Cairo, 1961, 336.	×	×	×
	al-Dhahabī	14世紀半ば	'U. 'A. Tadmuri(ed.), Vol. 29, Beirut, 1993, 42.	×	×	×
	Ibn al-Wardī	1350年以降	A. R. al-Badrāwī(ed.), Vol. 1, Beirut, 1970, 522.	×	×	×
	al-Yāfi'i	1367年以前	Ḥ. al-Manşūr(ed.), Vol. 3, Beirut, 1997, 69.	×	×	×
	Ibn Kathīr	1373年以前	A. Abū al-Ḥākim et al(eds.), Vol. 12, Beirut, 1985, 51.	×	×	×
	Ibn Khaldūn	1377年	Vol. 3, Beirut, n.d., 450.	×	×	×
	al-Maqrizī	1441年	M. M. Ziyāda(ed.), Vol. 1-1, Cairo, 1956, 30.	×	×	×
	al-'Aynī	1427年頃	イスタンブル・トプカプサライ博物館付属図書館 Ahmet III 2911a, Vol. 10, 224b.	○	×	×
	Ibn Taghribirdī	1469年以降	Vol. 5, Cairo, 1935, 189.	×	×	×

表2 ペルシア語史料におけるセルジューク朝の起源

通文 献 番 号 ス ト	著 者 名	書 名	執筆年	書 誌 情 報	キ ン ク 氏 族	イ ア ヤ フ ラ ア ス	ク セ の ル 父 ジ ュ ー
372	Anwarī	<i>Anīs al-Qulūb</i>	1211年	M. F. Köprülü (ed.), <i>Belleten</i> 7 (1943), 501.	×	×	لقمان
639	Nishāpūri	<i>Saljūq-Nāma</i>	1178年頃	A. H. Morton (ed.), Cambridge, 2004, 5.	×	×	لقمان
641	Rāwandī	<i>Rāhat al-Šudūr</i>	1206年頃	パリ・国立図書館 Suppl. Persan 1314, 40a.	×	×	لقمان
642	Yazdī	<i>‘Urāda fi Hikāyat al-Saljuqiya</i>	14世紀初頭	K. Stussheim (ed.), Leiden, 1909, 17.	×	×	لقمان
643	Anon.	<i>Risala-yi Juwaynī</i>	13世紀後半	パリ・国立図書館 Suppl. Persan 1556, 232a.	×	×	لقمان
1126	Anon.	<i>Tārkh-i Āl-i Saljuq dar Ānāqālī</i>	1296-1300年	N. Jalālī (ed.), Tehran, 1377Kh., 40.	×	×	لقمان
1127	Aqsarā’ī	<i>Musāmarat al-Akhbār</i>	1323年	O. Turan (ed.), Ankara, 1944, offset rep., Tehran, 1362 Kh., 10.	×	×	×
236	Qāḍī Aḥmad	<i>Walad-i Shajiq</i>	1316-35年	イスタンブール・スレイマニエ図書館 Fatih 4518, 141a.	×	×	بقاق
	Gardīzī	<i>Zayn al-Akhbār</i>	1049-53年	‘A. Ḥabībī (ed.), Tehran, 1363Kh., 410.	×	×	×
	Anon.	<i>Muḥmal al-Tawārīkh wa al-Qiṣaṣ</i>	1126年	Ī. Afshār & M. Umid-Salār (eds.), Tehran, 1379Kh., 145a.	×	×	×
	Jūzjānī	<i>Ṭabaqāt-i Nāṣirī</i>	1260年	‘A. Ḥabībī (ed.), 2 vols., Kabul, 1342-43Kh., offset rep., Tehran, 1363Kh., 248.	×	×	×
238	Baydāwī	<i>Nizām al-Tawārīkh</i>	1275年	M. H. Muḥaddith (ed.), Tehran, 1381Kh., 108.	×	×	×
239	Rashīd al-Dīn	<i>Jamī’ al-Tawārīkh</i>	1300-07年	A. Ateş (ed.), Vol. 2-5, Ankara, 1999, 5.	○	×	لقمان (طوقر دمش の子孫)
240	Kāshānī	<i>Zubdat al-Tawārīkh (Saljuq-Nāma)</i>	1304年頃	Ī. Afshār (ed.), Tehran, 1332Kh., 10.	○	×	لقمان (طوقر دمش の子孫)
242	Nīkpay b. Mas‘ūd	<i>Tārkh-i Nīkpay</i>	13-14世紀	パリ・国立図書館 Persan 61, 6a.	章なし		×
243	Banākātī	<i>Tārkh-i Banākātī</i>	1317年	J. Shi‘ār (ed.), Tehran, 1378Kh., 229.	×	×	×
244	Hindūshāh	<i>Tajārīb al-Salaf</i>	1323年頃	‘A. Iqbālī (ed.), Tehran, 1357Kh., 259.	×	×	×

245-1	Ḥamd-Allāh Mustawfī	<i>Zafar-Nāma</i>	1334年	N. Rastagār (ed.), Vol. 1, Tehran, 1377Kh., 640.	○	○	لقمان
245-2		<i>Tārīkh-i Guzida</i>	1330年	‘A. Nawā’i (ed.), Tehran, 1364Kh., 426.	○	○	×
246	Shabānkārā’i	<i>Majma’ al-Ansāb</i>	1332年	M. H. Muḥaddith (ed.), Vol. 2, Tehran, 1363Kh., 96.	×	×	لقمان
	Āmulī	<i>Naḡā’s al-Funūn</i>	1343-53年	S. I. Miyanjī (ed.), Vol. 2, Tehran, 1381Kh., 244.	×	×	×
247	Aharī	<i>Tārīkh-i Shāykh-Uways</i>	1359-74年	ライデン・ライデン大学付属図書館 Or. 341, 106.	○	×	لقمان
248	Qazwīnī	<i>Manāḥij al-Ṭalībīn</i>	1377年	ロンドン・英国図書館 I. O. 1660, 641b.	×	×	×
250-1		<i>Anonym Iskandar</i>	1412年以降	ロンドン・英国図書館 Or. 1566, 162a-162b.	○	○	لقمان (تقرشの子孫)
250-2	Naṭanzī	<i>Muntakhab al-Tawārīkh-i Muṭni</i>	1414年	パリ・国立図書館 Suppl. Persan 1651, 180b.	×	×	×
251-3		<i>Majma’-i-yi Ḥāfiẓ-i Abrū</i>	1412-17年	イスタンブル・スレイマニエ図書館 Damad Ibrahim Paşa 919, 573b.	○	×	لقمان (طوقدر میرの子孫)
251-4	Ḥāfiẓ-i Abrū	<i>Majma’ al-Tawārīkh-i Sulṭāniya</i>	1423-30年	イスタンブル・スレイマニエ図書館 Murad Mollā 1465, 70 b.	○	×	لقمان (طوقدر میرの子孫)
252-2	Ja’far b. Muḥammad	<i>Tārīkh-i Wāsiṭ</i>	1417年	コルカタ・王立アジア協会 D42, 149b.	×	×	×
253	al-Mūsawī	<i>Tārīkh-i Khayrāt</i>	1428年	ロンドン・英国図書館 Or. 4898, 162b-163a.	○	○	×
254	Fūshanjī	<i>‘Ibrat al-Nāẓirīn</i>	1434年頃	ロンドン・英国図書館 Or. 7944, 101b.	○	○	×
255	Muḥammad Bihāmad-Khānī	<i>Tārīkh-i Muḥammadi</i>	1438年頃	ロンドン・英国図書館 Or. 137, 207b.	×	×	×
257	Faṣṭḥ Khwāfī	<i>Majmal-i Faṣṭḥī</i>	1441年以降	M. Farrukh (ed.), Vol. 2, Mashhad, 1340Kh., 90.	×	×	لقمان
258	Hasan b. Shihāb Yazdī	<i>Jamī’ al-Tawārīkh-i Ḥasanī</i>	1451年以降	イスタンブル・スレイマニエ図書館 Fatih 4307, 171a.	×	×	بنقاص (その他 或は لقمان)
259	Shukr-Allāh	<i>Babiat al-Tawārīkh</i>	1456年頃	パリ・国立図書館 Suppl. Persan 1120, 142b.	×	×	×
260	Mīr-Khwānd	<i>Rawḍat al-Ṣafā</i>	1498年	J. Kiyānfar (ed.), Vol. 6, Tehran, 1380Kh., 3119.	×	×	بنقاص
261	Luṭf-Allāh	<i>Safinat al-Akhhār</i>	1496年	オックスフォード・ボードリアン図書館 Fraser 114, 49b.	○	○	×
262-1		<i>Ma’āthir al-Mulūk</i>	1498年	M. H. Muḥaddith (ed.), Tehran, 1372Kh., 127.	×	×	بنقاص
262-2	Khwānd-Amīr	<i>Khulāṣat al-Akhhār</i>	1499年頃	サンクトペテルブルグ・東洋学研究所 C812, 226a.	×	×	بنقاص

普 通 史